



■ 郊外から望む富士山

富士吉田あれこれ

坂の街

坂の意味について辞書を引いてみると、「一方は高く一方は低く、傾斜している道。 比喻として、物事の区切り・境。」とあります(『広辞苑』)。富士吉田市は市街地の標高で、もっとも低いところが約620m、反対に高いところで約850mを測ります。富士山の北面に展開する火山性扇状地上に南北を主軸とした市街地が乗っているため、町全体が坂になっている全国的に見ても稀有な町といえましょう。MARUBI13号の「あれこれ」で少しふれましたが、市内の道は南北の坂道(縦道)と傾斜の少ない横道にわけられます。主軸となる縦道では、左右の認識より傾斜(坂)のウエ(上)とシタ(下)あるいはノボリ(上る)クダリ(下る)という概念が用いられています。

交通が発達した現在では、市民の移動手段として、自家用車の利用が大半を占めています。市域に

限らず、公共交通が整備されていないところでは当然のことですが、当市の場合は、坂道であるため、徒歩や自転車の利用が「かたたるい」ことから、そのような方法を取る人は数えるくらいしかいません。そして、そのような歩行者の大半は、通学の小・中・高校生、自家用車の免許をお持ちでない年輩の方々であり、一方、自転車の利用頻度が高いため、高校生といえましょう。なお、ここでは小・中学生の自転車登校は認められていません。一直線の坂道はスピードがつきすぎます。町の規模に比べて、自家用車を所有する割合が高いので、歩行にはこのほうが注意する必要があります。右・左折による危険を避けるために、車が行過ぎるまでじっと待つ歩行者の姿をよく見かけます。自家用車で東京へ出てきて、吉田気分を運転していたら、「人が横断歩道を

歩いていて、事故を起こしそうになった」という笑えない話を耳にしたことがあります。

坂についての二つ目の用例として、物事の区切り、境の意味があります。地形を分割するところから、サカイ(堺・境)の転義ともされます。そのような意味をもつものに、「サカイ迎え」や「御境参り」の習俗があります。市域というサカイ迎えとは、「酒迎え」の意味で理解されており、富士登拝の道者を御師が酒樽をもって下吉田の入口である要染までお迎えに出ることを、そのように称していました。ここは坂にあたる場所ではありませんが、大きな境界の場所と意識されていました。また、上吉田では、正月や節供に「御境参り」がおこなわれていました。年寄りが集まって、子どもを連れて北口浅間神社の裏にある諏訪森から馬返の周辺まで出かけて、富士山を遙拝

した後で重箱に詰めたお弁当を食べるものでした。文字通り聖域である御山(富士山)と麓との境界に参詣するものでした。いずれにしても吉田の町への入口や御山への入山口をサカないしはサカイと認識してこのような習俗を残してきたわけです。

このような坂についてとらえ方は、よそとは多少異なっているようです。市全体が坂(傾斜地)の上に形成されていることから坂の地名は発達していません。〇〇坂とよばれるような坂の地名は少ないようです。標高630m前後を測り、自然条件の大きな区分となっている「暮地の坂」や、博物館に来る途中の「賣草の坂」は「の」をいれて呼称される坂地名であり、座りのいい地名とはいえないものです。そして、そのような場所が大きな境界と意識された場所になっていないことも興味深いことです。



上暮地の史跡を訪ねて

はじめに

富士吉田市の北部に位置する上暮地区は、西側は河口山(霜山)を境に河口湖町と接し、北側は西桂町と接しています。標高は650m前後と市域で最も低いことから、他の地区に比べて気候が温暖で、市内でも唯一二毛作のできる場所でした。

現在の上暮地区は、西北側の白糸町と東南側の寿町という2つの地区から構成されていますが、かつ

ては白糸町を古屋、寿町を新屋と呼んでいました。また白糸町には、江戸時代に日影・入(居里)・蟹沢・九穂・新道の5つの集落(村組)があり、村組ごとに道祖神を祀っていました。

上暮地区のなかで古くから集落のあったのは、白糸町の西側の山裾に近い場所、殿入川・翁沢川などの河川に沿って集落を形成していました。その後、江戸時代初期に桂川から引いた用水を利用して地区の南東側の溶岩台地(尾垂丸尾)

を開発し、そこに新たな集落を形成しました。

明治8年(1875)上暮地村は、下暮地・小沼・倉見(西桂町)・境・鹿留・夏狩・十日市場(都留市)の7カ村と合併して桂村の一部となり、昭和35年(1960)には西桂町から分町して富士吉田市へ合併しました。

本稿ではこの上暮地区を取上げ、地区を取り巻く自然環境や残された数々の史跡を通して、上暮地区の歴史や文化について紹介します。

私たちが住み慣れた地域のごく身近な歴史や文化を学び理解することは、郷土全体の歴史や文化を理解する上でも必要なことであり、残された文化遺産の価値を再認識する良い契機ともなっていると思います。

本稿を通じて、こうした私たちの身近にある文化遺産の価値を理解し、これら全てが先人たちの残したかけがえのない財産であることをあらためて認識していただければ幸いです。



上暮地村の成立

上暮地村は三ツ峠山から連なる霜山の南麓に開かれた村落で、かつては下暮地村と一つの村だったといえます。弘安5年(1282)日蓮聖人が身延から武蔵国池上(東京都)へ向かう途中に「奥地」に立ち寄ったという記録(『日蓮聖人註画讃』)があることから、鎌倉時代にはすでに集落があったことがわかります。

上暮地が一つの村としていつ頃成立したのかは定かではありませんが、文禄・慶長期(1592～1615)頃の記録(『四郡高ノ控』)に「上暮地村」と記されていることから、中世の末頃には上暮地村が一つの村として成立していたことがわかります。

また「暮地」という名の由来については、文化11年(1814)に著された『甲斐国志』に「上下暮地本一村ニシテ 西二高山ライタダキ 其ノ山足ニ人家連ナリタレバ日光早ク暮ルル故ニ暮地ト名ヅケナルベシ」とあり、集落が山の麓にあって日が早く暮れるので「暮地」と名づけたと記されています。

江戸時代の初期に、当時の谷村藩主秋元但馬守藩朝によって桂川に堰が設けられると、上暮地村は桂川の用水を使って集落の南東側の溶岩台地(尾垂丸尾)を開発し、貞享3年(1686)には51軒がその地に移住しました。そして、この新たにできた集落を「新屋敷」と呼ぶようになり、今までの集落を「古屋敷」と呼ぶことになりました。



■ 上暮地村絵図

今堰

今堰は、延宝2年(1674)に谷村藩主秋元高朝の灌漑事業によって桂川に開削された分水施設です。この堰によって桂川から引かれた用水は、上暮地字五名米倉から字新屋敷を通り、小沼方向へと流れ、上暮地や小沼地区の飲用や灌漑用に使われました。

また、現在の寿町(新屋敷)はこの用水によって溶岩台地を開拓してつくられた地域で、今堰の開削は、このような人の住めなかった地域への居住を可能にし、さらにこれまで住んでいた土地を田畑に変えることで、村の生産能力を高めることとなりました。



■ 今堰

暮地の坂

口論橋とショウコウ神

このショウコウ神は、後に流行眼（流行性結膜炎）のことをショウコウ目と呼んだことから、目の神様として祀られるようになったといわれます。

祖師堂

もオマンダラと呼ばれるようになりました。また、遠山という姓の由来についても、日蓮聖人が宿泊したときに家の者に時刻をたずねたところ「日は遠山にあり」と答えたことから、聖人はその家を遠山と名づけたといいます。

現在の祖師堂は昭和6年(1931)に再建されたもので、堂の前には天保11年(1840)の題目碑が建っています。

上暮地の史跡を訪ねて

浅間神社

浅間神社はセンノミヤとも呼ばれ、現在は白糸町で祀る神社です。神社が建立された年代や由緒など詳しいことはわかっていませんが、『甲斐国志』に「此ノ社上下暮地及小沼ノ境ニアリ 故二境ノ社ト云フ 三村一郷ニシテ此ノ社ヲ産神ト仰グト云フ」とあり、かつては上暮地・下暮地・小沼の三地区の産土神として祀られていたことがわかります。その後、三地区が分村してそれぞれの神社を祀るようになると、浅間神社は、最初「先」

祀っていた神社という意味から「先の宮」と呼ばれるようになりました。祭礼は、『甲斐国志』によると7月26日。現在は9月1日に行っています。

浅間神社の境内にはカヤの木で社が形成されています。現在38本あり、この中でもっとも大きなものは、根元の周囲が3.51m、高さ19mで市内でも最大のカヤといわれています。かつて、ここで採集したカヤの実で飴を作り、「カヤの飴(カヤ)」とよんで北口本宮富士浅間神社(上吉田)の祭礼のときに露店で売っていました。浅間神社のカヤ群は、平成6年(1994)市



寺ノ入遺跡

寺ノ入遺跡は、上暮地寺ノ入にある遺跡で、金峰山の南裾に半島状に突き出した東西の山が入り江状に囲んだ標高660mから670mの緩斜面に位置しています。

この遺跡は中世の寺院跡で、陶器の破片が数点出土しています。現在寿町にある宝珠山福昌寺の前身

となる寺院があったといわれ、この遺跡はその旧跡と考えられます。

『甲斐国志』に「開基ハ了山石室和尚延徳二庚戌年二月十五日寂ス、開山ハ明庵和尚文明十三辛丑年三月七日寂、古境内ハ此ヨリ北ニアリ、後諸堂ヲ今ノ地ニ移スト云」とあることから、この寺院の建物は15世紀末ごろのものと考えられます。

殿ノ入遺跡

殿ノ入遺跡は上暮地殿ノ入にあって、殿入川左岸の標高675mに位置しています。ここは殿入川によって形成された小規模な扇状地のため緩やかな斜面になっています。この遺跡からは平安時代の遺物が出土していることから、上暮地区の古い集落が殿入川に沿って

形成されていたことがわかっています。

また、殿入川の右岸にはかつて石塚がありそこから大量の銅銭が発見されています。これらは埋蔵銭といわれるもので、全部で5,217枚が出土しています。出土した銅銭の年代からここに埋蔵されたのは16世紀初頭頃と推定されますが、この当時は天災や戦争などがたびたび起こり、そうした社会情勢に対する不安から銭を埋め隠すというこ



■ 寺家遺跡

寺家の石仏

上暮地寺ノ入に寺家という場所があり、石造りの地蔵2体と如意輪観音3体が志村マキ(同族)の人たちによって祀られています。

ここにはかつて福昌寺がありましたが、寺が火災で焼失したことが

別場所に移されたといえます。そのとき、志村マキの人たちだけが墓を残したことから、寺にあった石仏をマキで祀るようになったといわれています。

現在この場所には、上暮地区の各所にあった馬頭観音などの石仏が集められ祀られています。

殿入川の化石層

殿入川の上流、標高710mほどの所に大きな採石場跡があります。この付近の岩場や川底を見ると貝類やサンゴ、ウニ、サメの歯などの化石を見つけることができます。これは、今から約500万年～700万年前にこの地域一帯が海底であったため、後の地殻変動で海底が隆起して浅い海となり、そこで泥・

砂・礫などが堆積しました。そして、海底はさらに隆起して現在のような山の一部に化石を含む地層を形成しました。この地層を西桂層群古屋砂岩層、桂川礫岩層といいます。古屋砂岩層という名称は、上暮地の古屋(白糸町)から名づけられたものです。西桂層群は御坂山地を桂川に沿って上野原町まで帯状に分布しています。

白糸の滝

白糸の滝は、上暮地区の西側、金峰山と御殿山の間を流れる殿入川の上流標高900mほどに位置します。滝は高さ150m、幅8mほどで、黒っぽい礫岩の絶壁をいく筋もの水が流れ落ちる様子が白い絹糸を吊り下げたように見えることから「白糸の滝」と名づけたといえます。

白糸の滝には、養蚕の神を祀った蚕影神社やその他にも観音像、不動明王像を祀った小さな祠があります。また、近くには三十三観音といわれる近世の石仏群もあって、古くから信仰の場所であったことがうかがえます。これは白糸の滝が山岳信仰の霊山として開かれた三ツ峠山の尾根の一部にあり、山岳修行者の修行の場所となっていたからで、後に民間に広まった観音信仰や養蚕信仰と結びつき、霊場として人々の信仰をあつめたものと思われる。



■白糸の滝

蚕影神社

蚕影神社は、白糸の滝の上にある洞穴に祀られています。オシラガミサマとも呼ばれ、蚕の神様を祀った神社です。

洞穴の中の社には、小さな招き猫がたくさん奉納されていますが、これは猫が蚕の害敵であるねずみ取ることから蚕の守り神とされたためです。この招き猫を1匹借りてきて家に置くと「蚕が

当たる」といわれ、借りてきた後にはそのお礼に招き猫を2匹に増やして再び奉納していました。蚕影神社の祭礼は4月15日で、養蚕の盛んだった頃には大勢の参詣者で賑わったといえます。しかし現在では崖の崩落などで祠まで行くことができなくなっています。



■蚕影神社



■神明神社

神明神社

神明神社は上暮地区の村氏神で、天照皇大神を祀っています。

神社の由緒などは明らかなではありませんが、はじめ上暮地芋梅久保に建立され、後に金峰山へと移されたといえます。しかしこの場所は富士山に面して寒暑の風が激しかったため、富士山の影になる現在の場所へ再度移したと伝えられています。

神明神社の祭礼は現在9月15日で灯籠祭りともいわれ、祭りに日には各家で箱灯籠を貼って飾っていました。

神明神社の社殿東側には大きなイチョウの木があります。根元の周囲7.28m、高さ25.4mあり、幹には乳房状の柱が数多く垂れ下がっています。母乳の出ない母親がこの乳柱に触ると乳の出がよくなると言い伝えられています。

山の神社

山の神社は大藤の山の神ともよばれ、かつては高山マキ(同族)の氏神でしたが、後に上暮地村で祀るようになり、現在では寿町で祀る神社となっています。

神社の境内にはフジの古木が二本あり、昭和3年(1928)に国の天然記念物に指定されています。このフジはノダフジという種類で、一本は根元の周囲が1.98mあり、昭和50年(1975)に巻きついていたスギが枯死したため、現在は金属製の柵で支えられています。また、もう一本は根元の周囲が2.18mあり、イタヤカエデの木に巻きついていました。このイタヤカエデも市の天然記念物に指定されています。

現在、フジの木は二本とも指定当時の樹勢はありませんが5月下旬には紫色の花を咲かせます。山の神社ではフジの開花にあわせ祭りをしています。



■山の神社

上暮地の史跡を訪ねて



■阿弥陀堂

阿弥陀堂

阿弥陀堂は、上嶋姓の6軒の家によって祀られたものです。上嶋家には阿弥陀如来を描いた軸が伝えられていますが、その裏書に大永元年(1521)とあることから室町時代に描かれたものであることがわか

ります。『甲斐国志』編纂のために原稿として記された『甲斐国志草稿』には「裏二大永元年以下摩滅万正寺トアリ 万正寺ハ古ヘ等々力村ノ万福寺ノ塔中寺ニテ 此幅ハ其本尊ナリト云フ 天正十年小山田被官上嶋六郎左衛門者万福寺二入テ剃度シテ万正寺ニ住ス 後上暮地ニ

帰り運俗シテ農家トナル 此時其本尊ヲ携来テ家付トセリ其孫六戸二分レテ伝之」とありその由緒を伝えてあります。この阿弥陀画像を現在でも同族が輪番で祀っていて、一方では木造の阿弥陀仏を本尊とする堂を尾垂丸尾に祭祀しています。

宝珠山 福昌寺

福昌寺は、都留市谷村にある長生寺末の曹洞宗寺院で、薬師如来を本尊としています。

明治26年(1893)に寺の住職によって記された「古跡取調書」によると、福昌寺はもと真言宗の寺院で上暮地寺宇ノ入にあり、後土御門天皇の時代(1464～1499)に明庵和尚によって曹洞宗に改宗され、寺号も福昌寺に改められました。そして、元禄2年(1689)に現在の場所へ移されたといわれています。また、宝永3年(1706)の「由緒書上」によると、寺は寛永15年(1638)の火災で諸堂・古記録類が焼失し、明暦1655～1658)

頃に諸堂を再建したとあります。

現在、上暮地地区の寺院は福昌寺だけとなっていますが、かつては、

法幢山清真庵、福寿山時眼寺(観音堂)十王堂などの福昌寺末の寺院がありました。



■福昌寺

おわりに

今回のレポートでは、上暮地地区の成立過程やその後の展開、また地区の歴史と深い関わりのある史跡や文化財について紹介しました。

こうした史跡や文化財が残された背景には、富士の裾野というこの地域特有の自然環境が大きく関与してきたということをご理解いただけたことと思います。

今回紹介できたのは上暮地地区の歩んだ歴史のほんの一部分に過ぎませんがこのレポートを通して、私たちがこの豊かな自然環境と先人たちが築き上げ、守りつづけてきた多くの文化遺産のもとで暮らし、これまでも地域に残された文化遺産を保護しつづけていくことの大切さを再認識していただければ幸いです。



■日月神社

日月神社

日月神社は TENTOUSAMA と呼ばれ、寿町で祀る神社です。祭神は、天照皇大神、金山神、熊野三神です。貞享元年(1684)上暮地村では村の南東側の岩谷台(尾垂丸尾)を開拓して新屋敷(寿町)としました。そして、翌年に天当山の中腹に日月社を祀り、その左に熊野社、右に金山社を祀って新屋敷の守り神としました。その後、熊野社と金山社は日月神社に合祀され、現在は日月神社の社殿だけになっています。神社の祭礼は、4月15日で寿町の人々のよって行われています。

おもな資料および参考文献

- 『甲斐国志』大日本誌大系44～48
- 『甲斐国志』第1巻・第4巻
- 『富士市史』資料編第1巻自然・考古、第2巻古代・中世
- 『富士市史』民俗編第1巻、第2巻
- 『上暮地の民俗』
- 富士市史民俗調査報告書第五集

【担当学芸員 齊藤 智子】



活動報告

企画展・博物館講座

企画展



『領主の富士信仰』- 狩野派の絵画を中心に -

平成13年4月28日(土)～5月27日(日)

富士山は古来より神の山として人々に信仰されてきました。かつては噴火を繰り返す荒ぶる神の山として崇拜の対象となり、後には山頂を神仏の浄土してめざす登拜の山として信仰されてきました。

今回の企画展では、富士山北面の信仰拠点である北口本宮富士浅間神社に奉納された近世前期の奉納物を紹介することで、この地域を統治してきた領主たちの富士山に対する信仰について考察しました。



『太々神楽と獅子神楽』

平成13年8月10日(金)～9月30日(日)

富士吉田市域は、全国的にみても、民俗芸能の宝庫といってよいところで、古い形態をとどめる太々神楽や祇園系の獅子神楽が存在し、また湯立の獅子神楽や巫女舞などの他地域への伝播も広く知

られています。今回の企画展では、市域に伝承されるこれらの神楽と他地域へと伝播された神楽を紹介することで、社会の変化にともない薄れつつある民俗芸能の実態を明らかにしました。



巡回展『山梨の遺跡展』

平成13年7月1日(日)～7月25日(水)

山梨県では、毎年数多くの遺跡が発掘調査されています。この企画展は平成12年度に発掘調査された県内各地の遺跡において出土した遺物を写真や解説を加えて紹介した、現在もっとも新しい成果

を報告するものです。

こうした遺跡の調査状況や出土した遺物を見ることは、発掘調査が少ない市域のみならずにとって考古学を理解するよい機会になったのではないのでしょうか。



『縄文土器作り教室作品展』

平成13年8月14日(火)～8月26日(日)

博物館講座「縄文土器作り教室」に参加していただいた皆さんの作品と縄文土器ができるまでの過程を写真とパネルで紹介しました。今回は大人の部・小人の部合せて30点の作品を展示しました。ど

の作品も参加者のひとりひとりの熱意が伝ってくる力作ばかりで、博物館を訪れた一般の人々も本物の縄文土器と違わぬ作品に感心しながら見学していました。

博物館講座

『縄文土器作り教室』

大人の部

第1回 平成13年6月3日(日)

第2回 平成13年7月1日(日)

第3回 平成13年8月12日(日)

小人の部

第1回 平成13年7月22日(日)

第2回 平成13年7月29日(日)

第3回 平成13年8月12日(日)

市内から出土した縄文土器をモデルに、当時と同じ方法で土器を製作することで縄文時代の技術を体験学習する講座です。ここでは、土器の材料となる粘土作りから始め、土器の成形と文様付け、野焼きまでを全3回の行程で行いました。前日の雨で野焼き場が濡れていたため、焼き上げまでに少し時間がかかりましたが、参加者全員が一生涯命を惜い甲斐もあって、どの作品も割れることなくすばらしい出来栄となりました。



■モデルを観察しながら縄文土器を製作



■講師の詳しい説明を聞きながらの散策(渡神社にて)

『市内新屋の歴史探訪』

平成13年5月20日(日)

私たちの住む地域の歴史を学ぶため、市内各地に残された史跡や文化財を徒歩で巡る講座です。今回は、富士吉田市の東南部に位置し、もっとも標高の高い新屋地区を散策しました。この講座では、各地域ごとに培われた歴史を学ぶことで、私たちの身近なところにも貴重な文化遺産やそれを育んだ豊かな自然環境があることを再認識していただくことを目的として開催しています。

博物館からのお知らせ



刊行図書

博物館蔵書『富士山道しるべを歩く』

江戸時代末期に刊行された『富士山道しるべ』をもとに、江戸日本橋から富士山頂までの登拝路を現在の地図に照らしあわせて紹介した富士登山のためのガイドブックです。かつて信仰の山として栄えた富士山への道筋をこのガイドブックを片手に歩いてみてはいかがでしょうか。

2001年3月31日発行/A5版・91ページ

価格1,000円

臨時休館のお知らせ

『燻蒸作業』

平成13年1月4日(金)～10日(木)

博物館では、収蔵資料をカビや害虫から守り、永年にわたって保存していくために毎年燻蒸作業を行っています。燻蒸期間中は閉館とな

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出る溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。



刊行図書

企画展図録『太々神楽と獅子神楽』

常設展示の「日々の暮らしと祭り」をさらに詳しく紹介するために、夏季企画展『太々神楽と獅子神楽』を実施して、その図録を刊行いたしました。市域に伝承される民俗芸能のうち、4ヶ所の太々神楽と2ヶ所の獅子神楽、また、市域から周辺へ伝播した太々神楽(巫女舞)と、湯立をとまなう獅子神楽についてあわせて収録しました。

2001年8月31日発行/A4版・89ページ

価格1,000円

富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日 / 月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜

・祝日を除く) 12月28日～翌1月3日

観覧料 / 大人 300円(団体 240円) 団体割引は 20名以上に適用

小中高生 150円(団体 120円)

交通案内 / ●中央自動車道河口湖ICより車で10分

●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面

バス15分、サンパークふじ下車



MARUBI 編集後記

今年の春、博物館付属施設「旧武蔵家住宅」の屋根が葺き替えられたことを契機に、住宅内の展示もリニューアルすることになりました。従来の展示資料をベースに、この建物が復元された江戸時代末期ごろの農家の生活が再現できるよう、10万点ともいわれる博物館収蔵資料の中から約100点ほどを選び展示をしました。収蔵資料だけでは決して完全なものとは言えませんが、当時の農家の雰囲気だけでも味わっていただけたらなと思っています。(SA)